

武家名目抄稿

文書部

廿六

和書門類	二五二〇六號	九七七函架	四五六冊
------	--------	-------	------

內閣文庫	和書類	二五二〇六號	四五六冊	一五三函架
------	-----	--------	------	-------

內閣文庫	
番號	和 25206
冊數	457(247)
函號	153 275



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



武家名目抄稿第二十六册

文書部二十二目録

感書

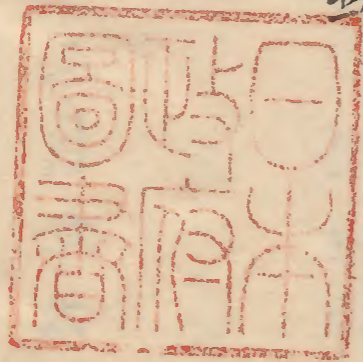
感状

感状

御感御教書

御感

印判御感



居判御感

證判狀

證判

一見狀

御感



武家名目抄稿第二十六冊
海東名目抄稿第二十六冊

武家名目抄稿第二十六冊

文書部二十二冊

感書

吾妻鑑云元曆元年十二月廿六辛巳佐

木三郎盛綱自馬渡備前國兒嶋追伐左馬

頭平行盛朝臣莫今日以御書蒙御感之仰

其詞曰

自昔雖有渡河水之數未聞以馬凌海浪

之例盛綱振舞布代勝事也云々
又云建久六年七月十六日戊戌武藏國務
事義信朝臣成敗尤叶民庶雅意之由就聞
召及今日被下御感御書云々
叔井日記云國中ヲ一々ニ丈夫ニ御仕置
為アラレ惡黨ノ根断シテナカレテ別所衆
小田垣松田等力勢并ニ搦原等力軍勢モ
灰色々高名トモ一候テ兩御屋形ヨリノ感

書ヲ下サレテ候衆モ少々不事ニテ候
清正記云秀吉公を以テ祈を祈後一テ伏兵
多ク子に合高名ノ多ク備の者一とあり清正
なる事者其門は前へ備の事其は其の内に指子并
り城乃祈と委細ふ言上中ナカレテ祈の
虎之助若少なりといへども目を心もききたる志
々々々乃働者其に在りん備の事とあり
金一とあり其路りか塔乃能知とあり

有感書に云

因幡國鳥取城為可責崩若陣為物見
為刻伏兵起以處以半兵欲攻討退兵
上右刀打、高名謀以神妙之至也因茲為
加増右石家行、早孫お抽軍忠者、加増
者也仍如件

天正九年六月廿九日 秀吉御判

加増虎此時二十第也

東遷基業云神君正親の功を賞し孫ひ西尾
の城を賜り神君群臣小城を賜の始也富永
伴五郎、糸色ハ布多吉三郎唐孝小賜、津
平色ハ松井左を右次に賜りて各感書を以て
褒給へり

感書と云感書ともいふ近代も清感ともいふ
いふ次々に見く、いふと何事も何れも
水清感よりいふ、其事を賞し、賜り

たる文書と感書ともいひしを後世に軍忠乃
ことし限りくりあしなむとす

感状

新田由良家傳記云成繁は清代りて感状を
以て古語代流新系元正を數多有るは身一
代者也感状影りしは古城中の古苑に出入り感
一と字一とを成るるは
又云

今度越前出張相生金山向兩地數日
立陣に処城に邊固新相抱一途に及
防、輝虎早に敗北武勇に至り名譽
も何れ以後に古右切一交報謝存諾
此条伊勢去庫頭方相雇中扇に仍る古
刀一腰老久所持に百多を奉祝依に委
細伊勢可為深祝に忍に謙言

卯月廿五日 右京大夫氏政互判

謹上 由良六郎殿

書禮袖珍寶云

感狀事

今度廣平王於青塚原在就御敵敵軍
被討捕得勝利之由感悅

比類

九月六日

白山出羽守殿

又云

去月九日和泉河内兩國之侍并玉民等

挾理心於八幡表合戰之由

死一生之不其方拙法陳弛向依畫

粉骨討畧之功勝利敵軍討捕剽被底

自今之高名無比類子抱之故不可殊列

他死去之度為忠恩周防半出

可被不知孫以可被屬軍患之候肝要能
詳云

文安元

六月廿日

善照院殿也
義政御判

細川出羽守殿

丹州書札式云何事云云感云被名石了云致成
沛書ハ可為感状。処色年ハ我切之由慶為計
中付也

今度於相州鎌倉合戦之時首級奉討
捕勝利之候感悦之至併忠告也

玉子孫可中付也云々禮言

永正 九月日 自藤兵衛

今度當國退治之候忠告為忠石之
向後身上不見放之候大就之局可述也

年号

六月廿四日

信長
印判

朝倉左衛門様と

今度於下総八幡郷合戦之時為左様討
捕と扱之候感脱之至以依以一國克
以弥可為致切状如件

取云

八月日

貞勝在判

岡崎備前守殿

今度於河内山下男山取之致忠意敵討多

取討捕之候尤以神妙為深可取扱致切
状如件

年号

卯月七日

原家判

書簡故實云

感状之事

去五月九日和泉河内両郡之侍共玉民
等挿野心お小憐表合戦之御御方及

雖一死一生之而不其方相所輩池白依
、終骨計略彼得據利敵投軍討捕刺被
、庶自公之高名無比執手柄之收不可獲
、討以死去今夜之為法忠堂用防半中
、付以死全可被不知以死以可勵軍忠之
、依所要以持之

六月七日 義政決判

細川出羽守

或又如此王可有之

昨廿日如右侍陣忍敵幸人討捕滅高名
之至無比類之感悅以仍刀一腰四光色
之以此可勵忠義事行要以此也

年月 月日 名系判

簡禮記云感狀一事武功ヲ賞而感狀

也料紙ハ鳥子ナルヘシ充所賞翫ナラハ
堅紙其外ハ折紙普通ノ法ナリ其月ノ
手柄ナラハ今度トハカリ可書月ノ隔夕
ルニハ今度何月何日ト書也其人ノ依働
非類之働目ヲ驚神妙奇特希代名譽ナト
ノ類敵ト所ト下知ト手勢ノ分別可有之
度々ノ手柄ニテ有功ノ輩ハ不可
ト書ヘシ一二度ノ手柄ナラハ度々ト書

之也依人可勵忠節可抽軍忠可盡忠功可
走廻ナト可盡加留端ハ者也留又ハ狀
如件又ハ謹言ナリ
每名記云紙トハ鳥子又ハ移系云ト折
帝トハ相認也又云移骨毒比類ニ似テ神妙
今感悦ハ可勵忠節子肝要也類又一紙子
細有之者ハ錢ト高名面應云ト云
可働様ニ可出也

三好記云 舍利寺 去ル廿一日 舍利寺ニテ

高名セシ 或ハ打死ノ侍ヲ注シ其品ニヨ

川政國遊佐河内守長教感状ヲツカハス

其状ニ云

去廿一日 攝州天王寺於舍利寺口合戰

之時子息與七郎隨分強敵引請教刻之

間禦戰或被太刀疵或被鎧疵於手前篠

原八郎打捕於太刀下打死前代未聞之

働為絶言語高名且云本意且云忠義莫

太之軍功於當家神妙之至也殊更星霜

其之契長教愁淚難盡筆紙次第候心底令

察候仍而弟子滿丸事相續可為肝要候

不感悅之餘泉州之内北政所三百餘石為

永代領全可知行候聊不可有相違者也

仍感状如件

七月廿三日 長教判

布忍入道殿

進之

義秋公方記云十月廿四日信長歸國ノ御
暇申サレケレハ今度大忠ノ至リ逆臣ヲ
不日追討シ將軍家再興人事信長一身ノ
所為也トテ御内書御感狀ヲ給ハリケル
其狀ニ云

今度國凶徒等不歷日不移時悉令退治
之條武勇天下第一也當家再興不可過

甲之彌國家之安治偏賴入之外無他猶藤
下孝惟政可申候也

永祿十一年十月廿四日 御判

織田彈正忠殿

今度依大忠紋相引兩筋遣之候可受武
功之事祝儀也

永祿十一年十月廿四日 御判

織田彈正忠殿

新撰信長記云寄手ニ丸ヲ責破本丸ノ塙
ニ手ヲ掛ケ我モ々々ト棄ケル間城中不
叶ハ九岐津岐モサニニニ戦討死シシ
テケリ以上討捕劬数八百七拾余信長御
御實檢ニ入レハ御感悦不斜ノ働之輕重
ニ依テ御褒美之品々ニ御感状ヲ添テ被
下ル者多カリケリ

甲陽軍鑑末書云武田方ノ海賊間宮小濱

伊丹大隅岡部忠兵衛衆舟ヲ早ノ北條衆
ヲ追カケ理運ニシテモトル武田ノ海
賊衆何時モ小勢ニ而如斯其日ハ向井兵
庫無類ノハシリノクリ也トテ勝頼公御
感状ヲ兵庫ニ被下也
北條五代記云天文十五年の比右比上杉
と氏康と武州よといふ合戦のみきり集一
書ありのすまれあはるく氏康よをあらうひ

の感状あり

大友興慶死云篠原目右京亮大将石見守

付捕多ふ故文章條に如くある感状あり

いふに切に志すべし感状ありは銀を

をらるるあり

又云秀吉公印感状條 比たひ結ぶ葉系目有地を

為し其者帳宗麟公の披露を遂その後使者

をよせ大関秀吉公に披露をよし感状あり

其書小曰大関二月廿二日於野原畑葉原目有度遂一

戦討捕首に注文并書状披見し碎し無

比類働ふる感状に玉為原二先物去月廿

五日明柴満前少将打立し相柴才助之

其外追討者少候故下月朔日に出法

馬候衆彼送徒急度可也創首ふ不可

過程に成其意々率ふ之討等無用候程思

田幼教由可申り也

天正三十七記云石川玄助一書子入

甲とつこれ強を是よりて令か長し

めし出かしくとしくおぬ人ありと

孤りりまやう地とほらうり

つてのひてらんし

安土日記云天正五年十月朔日片岡ノ城
取懸被攻長岡與一郎同弟頌五郎兄弟兄

ハ十五歳弟ハ十三若輩ニテ一番ニ乗入

中兩人ノ働無比類ノ旨忝モ被成御感状

後代人面目ナリ

又云文禄十二年十月廿四日御飯國之御

暇被仰上廿五日ニ御感状其御文言

今度國ノ凶徒等不歴日不移時悉令退

治之條武勇天下第一也當家再興不可

過之弥國家之安治偏憑入之外無他尚

藤孝惟政可申也

柴田退治記云今度柳瀨表秀吉所切崩之

一番鏝者悉近習之輩也其面々者福島市

松正則也坂甚内安治加藤孫六嘉明虎助

清正平野權平長康片桐助作直盛後糟屋

助右衛門尉櫻井左吉秀長近習也石川兵助一

光者一番懸入突内甲討死依之召出舍弟

長松一宗為家督者也右九人懸設席下盃

遣領知添以黄金羅帛兼有感狀其文曰

今度三七殿依御謀叛濃州大折令陣替

之刻秀吉柴田修理亮至柳瀨表取出

為可及一戰秀吉一騎馳向之處心懸

以不淺故早速懸着於眼前合一番鏝無

比類働之條為褒美或五十石或三十石充行訖彌

向後於抽軍旗之勤者於勲功可相討者

也仍如件

天正十一年七月十一日 秀吉判

清正記云 朝鮮 天正十一年七月十一日 秀吉判

天正十年三月十七日 倭中國寇之城攻

崩刻一番 倭寇と合兵名之 倭寇之

至也 倭寇之 領地重なる 倭寇也 仍感

悦之 状如件 田村 天正十年三月十八日

三月十八日 秀吉判 加藤虎之助

加藤虎之助 天正十年三月十八日

又云 大明人二年のあひこふ七十万の軍兵を

倭川四海乃ちあらしむとほく 朝鮮の軍兵とも

に百万蔚山の城をあたふ 倭寇に列

のき 倭寇をよめるその 倭寇 倭寇代まる

乃 倭寇也 倭寇 倭寇 倭寇 倭寇 倭寇

状 倭寇と下 倭寇 倭寇 倭寇 倭寇 倭寇

今 倭寇山西 大明人 倭寇 倭寇 倭寇 倭寇

倭寇 倭寇 倭寇 倭寇 倭寇 倭寇 倭寇 倭寇

此也

正月廿五日 御朱印

加茂至行殿後

武藏叢話云真田七本鎧ハ何れも記さる云
初如喜田陣占天正十三年閏八月のことなる
日廿日九子如城下一、是部内膳正長盛一子
も働き真田安房守昌幸と合戦の時
部内膳家人小麻又五郎一番鎧仕り奥山新

六所及内匠及平右内藤久五郎向山久内
留吹十助能働也家康公より是部内膳正御
感状下され家人七人へも同く御感状下さり
其内所及内匠及鎧正共名との以久云な
り小麻又五郎一番鎧と合其方一身は免悟
諸子も働れとの御感状あり

東邊奉業云所目付小豆毛一福永あり存垣
見和泉守熊谷内知允右田飛原守和茂攝

委く由事ふ人さ重しと申由朝の後彼等と踏
殺さるるを福永も後の縁者城見熊谷古田
も目と掛る者ともなきは後對し去ん
らく免罪といふとも御存る子細あり急き彼
等小切後中付く海しと申中なきは重治部
少輔彼使者も遠くは作越に趣るふんは
し各も不限朝鮮國も於て切立らきし事
時小は感状賜り去りも戦切の者趣と委
後

以矢言ふ載らるるこれ今更に疑有んや又加
藤原黒田辰清後へたしく古藤原の存る
事ハ亡君乃古御中よの言ふ所なきは是も他
人の所なきはあはれこれ何の所もあはれ我
等一人のたからむとて古田熊谷垣見福永
子腹切切去りし様なきは事とよくし
者しとてなきは事とよくし
いふ事矢在るに掛ける事と空しくせらるる

ハ多礼あり是非は事と果さるゝと使夜
多利

難波戦記云 賜御感状於淺野長晟 既ニ控
事付長晟討ニ揆等條

井一出張シタル大坂勢但馬守ニ戦ヒ負

テ城中ニ引退キタル由註進有テ首十三

ヲ献シケレハ兩御所御機嫌不斜ラ則御

感状ヲ玉ハリケル其詞ニ

於其表及一戦敵餘多被討取之條無比

類仕合御感思召候也

四月晦日 家康 御黒印

淺野但馬守殿

今度於其表無比類働因茲首数多到來
神妙思召候彌可励軍忠事肝要也

五月朔日 秀忠

淺野但馬守殿

按感状ト即前条乃感書ナリ是と状ト

よ、ハ状ハ札也増牒也 正款 方々見一々々

と形状一、墨子陳るハ義ヲ其何、歴紀

感状御朱印

續撰清正記云志岐乃城最去の旨委細表
吉公一戸上る色ハ終ニ片感状ハ由朱印二通
中事下一様ハ書了り

書状新加ハ披見ハ志岐城為成敗小西働、
付る人数相違也自身又渡海之方尤ハ

然而為後誥詰 天草出ハ亦ハ其方お手前進
品進切捨ハ由多插無比類ハ意取首不
及差上ハ金而志岐天草相至其申付次
舟波首其可持上ハ終ハ及行ハ之義理
分惜手五越度振ハ小西揚津守可相控ハ
侮ハ之率ハ之働ハ可付ハ於滿建強正
少彌増ハ由清門允可申也

十一月廿百由朱印

加茂主計頭後

志波之城為去之振子云云此其方為碎

至世比類之由新守石届此其油取之身

先取之石此乃天原表之身是又無越度

振子可中付此程淺建強正少彌可中此

也

十月五日 朱印

加茂主計頭後

毛利家記云秀元家中ノ諸士一被下ニ御

朱印

今度蔚山表敵取詰候處盡粉骨由自安

國寺具申越被聞召届神妙被思召候猶

増田右衛門尉石田治部少輔可申也

大正 正月廿一日 御朱印

完 戸備前守との一 浅口勝九郎との一

下人 略之

按朱平右东山殿内时大座より調進し
たりしと伊勢貞宗の將軍あり奉りし
と比ハ文書に捺るゝともたうりし也
季の世より及く文書に朱平と捺しし
是ること世より出づるより於て朱平と
く其文書の名とにありたりさるるに朱
平捺れしと感状と感状に朱平とあり也

御感御教書

吾妻鏡云寛元四年三月廿日己酉有臨時
評定市河次郎左衛門尉搦進強盜海賊等
賞事及度々高名畢有御感之由可賜御教
書且御恩沙汰之時載加注文可被申旨云
太平記云青野原顯家卿ヲハ武藏ノ越生
四郎左衛門尉奉討シカハ首ヲハ丹後國
住人武藤右京進政清是ヲ取テ甲太刀

刀ヲテ進覽ニタリケレハ師直是ヲ實檢
如疑フ所無リシカハ抽賞御感ノ御教書
夫兩人ニソ被下ケル
頼印僧正繪詞云初闕白旗一揆西大將ニ案内セス
驚ノ外城ニ責入テ挑戰事數廻ツイニ外城ヲ
攻メ落ス今日六字法中日ニアタルトテ
御方貴賤上下法驗ヲ悦ケル御感ノ御教
書ヲ被成テ云

當六字經修法中日驚城没落冥感令然
者也殊可被抽丹誠之状如件

永徳元年十一月十八日 氏滿在御判

遍照院僧正御房

又云南庭ニシテカノ頸驗知セラル院主
ノ一言寸モ夕カハス櫃澤城没落ノ事兼
テ知玉ヘシ事ノ不思議壹岐入道態壇所
ヘワ参賀シケル御感ノ御教書云

大勝金剛護摩二七^々日未滿永賢自害

畢祈念之至超常篇者也尤以神妙弥

可被致祈禱精誠之状如件

永德二年四月五日

遍照院僧正御房

按清感清教書とハ前条の感状と清教

書乃式に存スルモノを以たり歟

平僧正後詞に載るる考の清教書ハ

何れハ丹州書式ノ所謂清書清教書ト

りとのあり有る書式ハ系中ニ詳

あり

御感

松隣夜話云伊賀守申ハ雲州ハ故為景公

當謙信公兩殿ノ御感ヲ廿三ヲ御取候

由其聞工全ク承候最冥加ノ御覺工伊美

キ御下ニ候ト去某モ近キ比ヨリ謙信公

一 罷出所々ノ御陣一 致御供十六年以來

三 御感状廿一載キ罷有候

甲陽軍鑑云 沛感の事トヨク其ノ方走廻

諸軍行ヨク其ノ神妙あり又人数モ

さる小身の人上ノ手扱モ其ノ方一身

乃走廻モもつて其ノ意とつけられ人

其回心被取ル境目ありたりたゞ其馬

出さるるハ我主家親斗のせりあひり

上ノ方ヨク其ノ方一身其走廻をもち

数千の味方と相助けや平に者も皆

まじりて走廻侍る手扱の武士ヨク其ノ人

もさるるをもちらさるる走廻神妙ありと

されば其主家親貝少負の批判あり中

やれば走廻をもちりたり上乃手扱其

うつもの如く者之をハ二十人頭位中百

頭元をもちりたり其れありて諸

按清感と云ふ清感状と云ふ是記を略し
るに云ふなり凡皇朝の風流は云語を
下略し云ふ習俗よく朱印此清書哉
朱印と云ふ練緯乃小袖と練緯と云ふ
の類松卷もあつた

印判御感

居判御感

甲陽軍鑑云天正八年庚辰三月末に勝頼

上伊豆此國表一清働あり中より日暮向井
と云ふたふひふきおまれと云ふ里免く里なりと
て勝頼此感状を向井と云ふなりと云ふ是俱此
判乃此感るふと長篠合戦以好ハ信云云此
代に云ふ此感乃在云人甲州一系るるすまれ
也此句ハ武田家をいへ他國ハまの感入きと
あるは是判の清感と云ふなりと云ふ是

中々如件

證判狀

庭訓法本云「弁」一名被謁於首者載證判狀
可被備後胤龜鏡者也

按此判狀と熟切のこゝと書法は新々
首將の花押と交々後此とある文書の
こゝと書法は次々あり是を又例
の者信々此判とのこゝと交々花押の
上と承了と書と何りりするもあり又一

見了とも書る故に一見状ともり次子見
えり

證判

角田文書云

美作國御家人角田彌平入道正秀為軍
三忠雖令在鎌倉候去九月廿一日馳參候
以此旨可有御披露候恐惶謹言

元弘三年十月二日

沙弥正秀

證則進上天山御奉行所二。

三刀屋文書云

出雲國三刀屋太田庄藤卷村地頭左兵

衛尉守佐輔景今年

建武正月十日令發

營向山崎致軍忠同日行幸、仕於叡山

任左衛門尉則屬于當御手令勤仕西坂

本、同廿七日合戰自加茂河原迄于七

條河原抽軍忠之旨伯耆四郎左衛門尉

并安東弥二郎入道等令見知者也同時

合戰伯耆中務丞相共於一條河原并桂

河以下所々致軍忠迄于西山峯堂令發

向之條御見知之上伯耆中務丞以下同

時合戰顯然也然者云行幸供奉之功云

度々軍忠無隱上者賜御證判弥欲抽忠

節以此旨可有御披露候恐惶謹言

建武三年二月日左兵衛尉輔景

進上軍出御奉行所

船田經政

花押

出雲國三刀屋鄉因幡國玉出保等地頭

諏方部三郎入道信惠申六月晦日御合

戰之時最前馳向竹田河原討捕御敵

和田

四郎次郎云々若黨原四郎五郎光忠被切左手

畢彼是御實檢之上者預御證判可備向

後龜鏡之由以此旨可有御披露候哉恐

惶謹言

建武三年七月日沙弥信惠狀

進上御奉行所

同前

承了花押

和籙集要云

決判事

秀野周防古用五九代同安藝八御系光
申物多合致之事親又古郎左衛門尉陸
属于當御手馳向京去月 正月朔日至
于同十一日連日致合致堅固毎日櫛爪
於高矣死相軍忠之象今川五郎入道及
御兄知平兵上於軍陣無中退上者錫
御沈判為備後記也言上出件

建武三年七月日

新田左馬隊及

諏訪部文書云

目安

諏訪部三郎入道信惠申属于當御手

致度々軍忠間事

一今年正月廿二日海道御發向之間御共

仕於美濃國山中用害致無貳之警固畢

一同月晦日夜就御歎没落伊勢國御發向
之間御共仕二月十四日同國雲津河合
戰致軍忠者也

一二月十六日同國於櫛田河合戰馳向山
手同所抽合戰忠節也此條山口三郎若
槻下總孫太郎佐々布周防房令存知者
也次去年南都御發向之時同御共仕數
ヶ月致警固畢然早下賜御判為備龜鏡

恐々言上如件

建武五年三月三日

承了花押

目安

諏訪部三郎入道信惠申軍忠間事

去五月晦日属于當御手罷向大渡同六
月一日自宇治馳向洞嶺攻入八幡山城
戶口致軍忠同日大渡御發向之間御共

仕於橋瓜抽合戰之忠追返御敵畢同月
十八日打渡放生會河終日致軍忠畢次
七月二日重押寄放生會河致合戰同月
十一日夜攻落御敵畢同十二日馳向禁
野片野燒拂在家等畢然者去自五月晦
日至于七月十二日云度々合戰云晝夜
警固致随分忠勤畢此等次第山口七郎
三郎入道高井左近允令存知上者賜御

判為備龜鏡恐々言上如件

建武五年七月十八日

矢部文書云

矢部八郎左衛門尉定友軍忠子
右去年四月六日自京都下向之時
供仕軍次常州而後向之時同九月八日
馳參武州村岡宿所、所陳所供仕十月
廿二日馳向並木渡同廿三日越杉立渡

進散山徒燒拂在取回駒館野以之合戰
之時致軍忠之系矣野孫次郎大田民部
見知所次同廿五日南城清敵向之時越
一堀橋致軍忠系山河判官見知了同廿
六日夜搦向矢倉廿七日取清敵打出堀
口之官走向追詢彼等於堀口之系矣時
彦右衛門賀揚五郎三郎見知了次十一月
七日越堀搦矢倉軍忠之系陳責族一族

見知了同八月高矢倉前壁切破唐垣之
系山河判官結城一族等同所合戰之內
見知了次廿九日取清敵打出堀口之官
未惣領矢部左衛門尉相借持身令追詢彼
等之系為清前合戰見知了將亦今年五
廿六日為二番子分付壁致合戰忠之系
矢部左衛門尉見知了次去年十月以來南
參高陣之官攻口保取以下果役勤仕之

物早賜判為備後記仍言上如件

曆應三年五月日

高師冬花押

土岐家聞書云等持院殿高師冬氏時古岐伯

者入道殿賴貞法名存孝作也此以來

相違有北條先代を亡さるる處ととて家前小

伯州作合せしと云々古岐多之是也

也一と清軒約有けりと古老中侍也尚

方夜々錯乱せしにさるる清純判也多

く紛失也

一見状上書云新田左馬頭氏明一見状

天野文書云新田左馬頭氏明一見状

天野防七郎左衛門尉經顯中子息三

郎經政關東合戰事

右去元弘五月十八日經顯經政最前馳

参于片瀨河原則奉属于此御手懸彼箱

村崎之陣迄于箱瀨河并前濱鳥居殿致

合戰忠之處若黨犬居左衛門五郎茂宗
小河彦七安重中間孫五郎等令討死訖
自同廿一日迄于廿二日之葛西谷之合
戰致軍忠訖此等次第御見知之上同時
合戰之間新田次郎上野国住人山
上七郎五郎見知之間就捧請文御注進
一見之上者為後證欲申賜御證判矣仍言上
如件

元弘元年十二月日
一見了御判

鳴津文書云

鳴津大隅前司入道々意申

薩摩國凶徒等益山四郎入道子息兄弟
同一族以下并古木彦五郎入道子息兄
弟以下一族等率數多勢同國伊作庄内
中原構城郭立籠間以去六月十一日押

寄彼城責落城郭御敵等古木彦五郎入
道益山十郎入道同彦六以下依令打捕
數輩御敵等被疵若黨交名注文
一人上原中務丞尚經 左股射疵
一人鎌田孫次郎長正 左脇切疵
一人右馬七郎入道木 右膝射疵
一人山田彦太郎忠行 左腰射疵
一同國阿多郡高橋松原合戰支

御敵較島彦次郎入道伊集院助三郎谷
山五郎左衛門入道市來太郎左衛門入
道鹿兒島郡司知覽院又四郎光富又五
郎入道石堂彦次郎入道秋次三位房益
山新次郎古木三郎入道以下凶徒等率
數千騎軍勢以去七月廿一日寄來之間
下向子息親賴類若黨等高橋松原口致合
戰依令打捕數輩凶徒等被疵若黨交名

注文

一人 葛部孫四郎久善 右肩先射疵

一人 西郷九郎秀範 左膝射疵

一人 三原満兵衛尉重吉 左股射疵

一人 山崎右衛門五郎祐範 左目上切

一人 山崎致度 合戦上者为賜御一見状且

目安如件

建武四年八月三日

島津

花押

承

花押

武家名目抄稿二十六冊

同治十六年六月

封合

卷本百一



同治十六年六月十日蘇林王

敬志

同治十六年六月十日再封并書 蘇山宗卓

同治十六年六月十日蘇林王 小禮由人



